

今年も大晦日になった。またこの日を迎えた。

道行く人は誰もが慌たらしい。年賀状を元旦に間に合わせようと郵便局に駆け込む人や、近所のスーパールの口が入ったレジ袋を重そうに抱える人などが行き交っている。

川瀬一樹かわせいつきも例に漏れずスーパーに向かうところだった。

大学生になって初の年末年始。今年は一人だ。実家に帰ろうとは思っていたが、新幹線の予約が取れなかったのだ。母親に帰らないことを報告したらひどく残念そうにしていたが仕方がない。まさか一か月前には満席になっているなんて思わないじゃないか。

どうせ一人だしお正月の準備なんてほとんどしていない。昨日は大掃除と称して2日間ため込んだ洗濯を一気に回し、数か月出しっぱなしだった本を数冊しまった。今日は明日から休暇に入るスーパーへ買い出した。道行く人を横目で流しながら、今夜は何をしようかと思考を巡らせる。お正月は家族でテレビを見て過ごすのが恒例だが、一人暮らしのアパートにテレビは無い。年越し中継はネットでも配信されているだろうが、別に映像を見ることがお正月っぽい訳ではない。夜中まで家族と机を囲み、番組名だけで大晦日を想起させるほど定着している年末特番を見るところが特別なのだ。

後、年末年始の行事と言えば……、

「初詣、かな」

僕ら家族はたった一回を除き初詣を欠かしたことがない。その一回が9年前、妹が亡くなった翌年だ。妹の実晴は小児がんを患って生まれてきた。入院を繰り返す生活の中、初詣は実晴が何よりも楽しみにしていたイベ

ントだ。初めて家族で初詣に行ったときに屋台で買ってもらったチョコバナナがとても美味しかったらしい。遊園地とか水族館とかの方が楽しいと思うのだが、実晴にとつての一番が初詣なら口を挟むことでもない。入院期間でも年末年始は外泊で家に帰ってきて、元旦の朝から家族で初詣に繰り出したものだ。

両親は実晴がそう永くは生きられないことを医師から聞いていたのだろう。入院中は交代で付き添ったし、退院して家にいる希少な時間に実晴が望むことをできる限り叶えようとしていた。

僕にとつても実晴は何よりも優先すべき存在だった。実晴が生まれて以降、入院時は慌たらしい日々が続き、退院しても急変する不安から家は喜びと緊張が溢れている。終わりのない異質な日々が続いていた。そんな中でも実晴が笑えばみんなが笑う。

初めは両親の関心を一身に集めるほど大切な存在なのだ、と理解していた程度だった。しかし、年数を重ねるにつれて実晴の屈託ない明るさに触れ、家族を幸せにできる実晴は特別なのだと感じた。実晴は僕にとつて、兄として無条件で守るべき大切な妹になったのだ。

だから僕も家族でいるときは実晴の喜びを最優先にしたり、その実晴が何よりも楽しみにしている初詣は一大イベントだった。

そして10年前、来年も初詣に行きたい、行きたいと言いつつ続けた12月31日。実晴は6歳でこの世を去った。現実には非常だとあれほど思ったことはない。さすがに実晴が亡くなった翌日に初詣に行くことは無かったが、その次の年からは毎年家族で初詣をしてきた。

僕らなりの弔いだ。弔いなんて遺された者のエゴではないとしても、僕らにとつては意味がある。

実晴は一生懸命生き抜いた。僕らも僕らの人生を前を向いて生きて行こう。それでもこの初詣のときだけは、必ず実晴を思い出す時間にしよう。

それが家族の約束事だった。例えば家族揃つての初詣じやなくてもこの約束は変わらない。そうだ。1日の朝に家を出る予定だったが、前倒しして夜に神社に向かおう。たまには実晴の命日に初詣に行くのも悪くない。家で一人で過ごすよりも、実晴のための時間に充てる方がよっぽど有意義だ。

一度心が決まればそれが最善の案に思えてくる。僕はスーパ―に向けて足早に歩を進めた。

※

夜。扉を開けると凍てつくような寒さに覆われた。同じ12月でも夜の寒さは桁が違ふ。向かう神社はもう決まっていた。徒歩で行ける宮司さんもないような小さな神社だ。電車に乗って少し行けば人が集まる有名な神社もあるのだが、大晦日は参拝客で溢れるのだ。冬の夜に長時間列に並ぶのは少し辛い。大事なのは初詣自体なので、小さな神社でも落ち着いて参拝できる方が良い。

住宅街から逸れて木に囲まれた細い石畳を進む。以前散歩中に見つけた神社で、ネット上のマップにもかろうじて「浅間神社」と名前が載っていた。しかし浅間神社というのは固有名称ではなく、富士山を祀る神社の総称らしい。つまり名前はあつて無いようなものだ。

スマホのライトで周囲を照らしても葉の散つた枝が続くばかり。神社までの距離もつかめないが、今は足

元だけ照らしてとりあえず前に進んでいた。歩いていればいつかは着く。それにしても距離があるなあ、などと考へていると、突然足元に何か照らし出された。ライトを向けると階段が数段。正面には石造りの鳥居が立っていた。その先には小さな社が見える。夜、神社は見事に木々に紛れ込んでいる。ここに続く道がなければ気付かなかつたかもしれない。

境内までは数歩でたどり着いた。狭い神社のはずなのに、周囲に暗闇が広がり続けているせいでやけに広く感じる。

寂れている。社の前に立ち、前と全く同じ感想を抱いた。石畳だからかろうじて道が残っているだけで、最近では整備もされていないのだろう。暗闇でも分かるほどに傷んだ木枠、継ぎ目から生えるコケ。劣化は顕著だ。

凍てつくような寒さが身に染みる。ここには廢れた鳥居と社があるだけで人の気配はおろか灯籠の明かりもない。一樹は大きな神社に行かなかつたことを若干後悔し始めた。なんて言うか、怖い。現実にはホラーなんてものは存在しないのだが、そういう話抜きで雰囲気怖い。

「実晴がいたら泣いてたなあ……」

静寂をかき消すようにつぶやく。せつかくここまで来たのならお参りはしてきたい。多少不気味な雰囲気があつたとしても少し慣れればただの神社だ。どうってことは無い。

時刻は11時半。初詣にはちょっと早すぎる。本来なら年明けを待つのだろうか……30分待ちには厳しい寒さだ。元々初詣の形式にはこだわりがない。僕は5円玉を古びた賽銭箱に投げ入れて手を合わせた。

初詣で祈ることは毎年同じ。

「実晴が幸せでありますように」

それだけだ。神様なんていない。冷静に考えれば当然のことだし、もしいるなら大晦日に実晴を連れて行つたりしないだろう。人は死んでしまえばそれっきり。実晴は天国で幸せにしているだろうなんて本気で信じているわけではない。毎年の初詣は実晴のためのものだ。架空のものに祈るなら架空の願いをして、少しでも実晴に思いを馳せる方がずっと良い。

毎年この瞬間、脳裏には実晴との記憶がよみがえる。10年が経ち、僕は18歳になった。実晴の3倍生きたのに実晴は当時の姿のまま変わらない。年月が経つほど離れていく。

実晴。僕は大学生になったんだ。実晴に教えてあげたいことがたくさんあるんだよ。実晴は好奇心旺盛だし、僕が話すどんなものでも「面白い！」って言うんだろうね。あ、僕は最近コーヒーが飲めるようになったけど、あれは実晴には苦すぎるよね。他にも……、他にも実晴に知ってほしいことがたくさんあるんだ……。

「参拝？」

唐突に背後から幼い声。

「初詣に来たの？わざわざここに来るとか変な人」

間髪入れずに声は続ける。僕は手を合わせた格好で刹那の間硬直し、次の瞬間ぎよつとして振り向いた。

「しかもまだ年明け……え？」

今度は背後の声、着物の女の子が僕を見つめて固まる番だった。

「……びつくりしたあ」

呟きながら僕はかぐんで女の子に目線を合わせる。声をかけられた瞬間は驚いたが、今日は大晦日。神社に着物を着た少女。結論は一つだ。

「こんばんは。君も初詣に来たの？」

こんな神社で初詣をしようなんて考える人はそういう言いはずだが、実際に僕が来ているので誰もいないとは言切れない。

「お父さんかお母さんと一緒じゃないの？」

見たところこの女の子は小学1、2年生くらいだ。しかし近くに大人がいそうな気配がない。まさかこの一本道ではぐれたとは思えないのだが……。

「咲夜に言ってるの？」

さつきから不思議そうに僕を覗き込んでいた女の子が突然喋り出した。予想外の返答に若干戸惑う。他に誰がいるというのか。

「うん、そうだよ。咲夜ちゃんに教えて欲しいんだ。お父さんかお母さんと来たの？」

「ううん、咲夜は一人だよ。お話するの久しぶり！お兄さんは誰？」

「僕は一樹だよ。川瀬一樹。近くに住んでるんだ」

咲夜がにつこりと笑いかけてくる。人懐っこい子だ。しかし、一人？話が久しぶり？何か違和感がある。

親に放置されているのでは？と嫌な想像をしたが、咲夜は白地に桜色の花が描かれたかわいらしい着物を着て背中に綺麗な黒髪を流している。放置されているとも考えにくい。

「咲夜ちゃんも近くに住んでるの？」

「近く？うん、そうだね」

「一人だとお父さんもお母さんも心配するよ。送っ

ていくからおうちに帰ろう？」

「え、咲夜はここに帰ってきたんだよ？それに一人だつて言ったじゃん。一樹は変な人だね」

どうしよう、話が噛み合わない。言葉はスムーズに見えるけど、少し会話が苦手な子なのではないかと思案を巡らせる。

「そうだ。咲夜ちゃん、少し寒くない？街まで戻ろうよ。」

何かあったかい飲み物でも買ってあげる」

恐らく迷子だ。それなら親が探しているはずだし、街に戻った方が見つけてもらえるだろう。初詣に行く途中に親とはぐれ、秘密の遊び場になっているこの神社に来たとか、そういうところではないだろうか。もし見つからなかったり迷子ではなかったりしたとしても、最終手段は交番に行くことだ。

しかし咲夜の反応は鈍い。

「一緒に？それは良いけどまた年明けじゃないもん」

「あ、そっか。初詣に来たんだからお参りしていきたいよね」

時計を見ると、年明けまではあと15分。待てなくてもないが待ちたくない時間だ。

「咲夜ちゃんは寒くないの？着物可愛いけどその一枚だけでしょ？」

「いや、咲夜は寒いか無いよ」

「そう？でも風邪ひいちゃったら大変だよ。きっと街まで戻ればあったかいものもあるし」

「咲夜は食べたり飲んだりできないもん。それに風邪とか咲夜がひくわけじゃないじゃん」

どうしよう、やっぱり話が噛み合わない。いや、聞かされたことにしっかりと返答しているという意味では話は噛み合っているのか。しかしその内容が僕には理解でき

ない。子供が独自の世界を持っているものなのはおかしくないが、それにしても何かがおかしい。

僕の困惑した表情を見つめながら、ふいに咲夜は「あ」と声を漏らす。

「もしかして、咲夜が生きた他の子と同じだと思ってるの？」

それから年明けまで、咲夜は驚くほどよく喋った。よく言葉が尽きないな、と驚くほど次々に言葉を並べ立てる。僕が話を挟む余地もなかった。

咲夜いわく、咲夜はずっと昔にこの神社で亡くなったそう。咲夜は他の人には見えないし、寒さや空腹を感じることも無い。着物や綺麗な梳かされた髪も含めて今の咲夜は生前の最期の姿そのまま、全く変わらないそう。

なぜか時々、僕のように咲夜を見て話をできる人が現れる。その理由や咲夜を見ることが出来る条件は全く分からないらしい。

幽霊じゃないかと思つたが、幽霊ではないのだと何度か念押しされた。咲夜が言うには「幽霊と言うには現世になじみ過ぎていて」そう。

「幽霊なら長くても数週間で消えちゃうの。でも咲夜は何百年？もいるからもう幽霊ではないよね。永久に現世をさまよつとか嫌だよ。でも一度だけ、この神社で声を聞いたの。『その時が来たら迎えをやる。お前が幽体として消えることはもうない。しかしまだごちらの世界に入れる存在でもない。しばらく現世を巡ると良い』って。すごくない？一言一句違わず覚えてるんだよ。きつとあれはこの神社の神様だね。それで咲夜はそれに従って……」

…あ、年明け」

時計を見るとちようど0時だ。咲夜は社の前に向かう。

正直、咲夜の話には半信半疑だった。やけに具体的だが、子どもの空想と言えなくもない。実晴もよく自分なりのお話を作り上げて、僕や両親に得意げに語っていた。

とにかく年明けになったのだ。お参りをすれば咲夜は満足するだろうし、街まで連れて行けば良い。

そう思っているが、咲夜は社の前に立つたままお参りをする気配はない。

「小銭いる？」

声をかけるが咲夜は首を振った。

「お参りがしたいわけじゃないもん…今年もダメそうだね」

そう言うと、くると社に背を向ける。

「街に出たいんでしょ？もういいよ！」

「あ、うん。行こうか」

移動する気になってくれたのなら、それに越したことはない。咲夜に続いて神社を出て、僕らはまた石畳の道を街に向かって歩き出した。

街に向かう間、咲夜の興味は僕の話に移った。しかし

もう十分わかっているが咲夜はともおしゃべりだ。僕の返答に対してその倍の質問が返ってくる。

「僕には実晴っていう妹がいたんだ」

「いた？じゃあ亡くなっちゃったんだ。何歳なの？…」

6歳なら咲夜と一緒にじゃーん！」

「大学って何？行ったことあるけどおじさんが一人で喋って、なんかいっぱい座ってる人たちが好き勝手なことしてるだけじゃん。おじさんも座ってる人もなんでそんなことしてるの？」

これには思わず笑った。本当にその通りだ。

こんな調子で8割は咲夜が喋っていた。初めは驚いたが、咲夜のマシンガントークも慣れると面白い。

*

帰りは行き程長く感じなかった。街に出ると、人通り

も結構ある。元旦の深夜なら当然だ。

そして僕は咲夜の話信じざるを得なくなった。

街に出ると行きかう人々を見て、咲夜は片っ端から声をかけ始めたのだ。

「ねえ、どこ行くの？初詣でしょ！」

「おじちゃんたちは夫婦？仲良しだね！」

初めは突然見知らぬ人に話しかけるので慌てたが、話しかけられた人は咲夜に見向きもしない。分かった上で無視しているのではなく、一瞥もしない。ああ、本当に見えていないのだなと納得するしかなかった。

正直神様とかは信じていなかった。しかし目の前で、咲夜が本当に生きていない何かだと見せつけられると、信じないわけにもいかない。否定できない状況になると、自分でも意外なほどに受け入れはスムーズだった。

そして同時に咲夜のマシンガントークの理由も分かった気がした。誰に話しかけても何の反応も返ってこないの、咲夜は言葉を途切らせることなく一方的に喋り続けるのだ。きつと癖になっているのだろう。

「もう分かったよ。だから行こう」

そつと咲夜に話しかけると、「ん？何が分かったの？」と返された。どうやら咲夜が他の人には見えないことを分かって欲しかったのではなく、ただいつものように行動してただけのようだ。

しかし無視され続ける咲夜を見てるとこちらがいたたまれない。もう一度「行こう」と声をかけると、咲夜は素直に歩き始める。

「一樹、どこ行くの？」

「うーん…帰ろうかなあ」

咲夜を両親のもとに送り届けてから家に帰るつもりだったが、もう咲夜を送る先などないのは明白だ。

「咲夜も行く！」

こう言うだろうとも思っていた。咲夜は子どもだ。あの神社や街中に置き去りにするのは抵抗がある。仕方がないだろう。

「面白いものなんて何もないよ？」

「そりゃ一樹にとっては慣れ親しんだ場所だし面白くないでしょ。咲夜にとっては初めての場所だもん」

話していると実感するが咲夜は基本的に賢い。語彙力もある。しかしどこか幼くて、やっぱり子どもなのだと思わされる。咲夜の言うことが本当ならば、僕よりもずっと長い時間をこの世で過ごしてきたはずだ。しかし、咲夜を年上だとはどうしても思えない。姿形だけではなく、どこか幼さを感じるのだ。

部屋に戻ると、急激に疲労が襲ってきた。咲夜と街を歩くのは簡単ではない。あれは何だ、これが面白い、とお喋りが止まらないのはもちろん、唐突に道行く人に話しかけたりと、とにかく忙しない。

初めは「咲夜、どこ行くの？」といちいち声をかけて進路に戻そうとしたが、途中から諦めた。咲夜の歩みに合わせてゆつくりと帰ったのでいつもの3倍は時間がかかった。

家についてからも取り出した鍵を見ては変な形だ、な

ぜこれで施錠ができるのかと問い、電気をつけるともう一回やって、と5回は消灯と点灯を繰り返した。

咲夜は街を彷徨いながら暮らしていたらしいので、この街は見慣れているはずだし現代の文明品も知っているはずだ。しかし、とにかく話をして返事が来るのが嬉しいのだろう。次々に興味を様々なものに移しては話しかけてくる。

今は炬燵に興味津々だ。咲夜自身はものに触れられないようなので表面をペタペタと触っては布団の模様を覗き込んでいる。

そういえば実晴もこんな風に好奇心旺盛な子だったな、などと考えながら、僕は炬燵で寝落ちした。

*

目を覚まして壁の時計に目をやると、六時半を指している。元且から炬燵で寝てしまった。今年は幸先が悪い。

身体を起こすと、炬燵の脇で体を丸めて寝ている咲夜が目に入った。やはり昨日の出来事は現実だ。

僕は咲夜に炬燵の布団をかけてやってから、洗顔や着替えを済ませてリビングに戻った。お湯を沸かして、生ものだけ片付けたまま放置してある買物袋からインスタントコーヒーの瓶を取り出す。

「……一樹？何してるの？」

マグカップにお湯を注いでいると、咲夜が炬燵から這い出してきた。

「朝の準備。咲夜は何か食べるの？」

「うん。いらない」

「そっか」と返事をしてインスタントコーヒーを飲む。

元且の雰囲気の欠片もない朝だ。

昨日は深く考えずに咲夜を受け入れてしまったけれど、これからこの子をどうしたら良いのだろうか。やはり子どもを放り出すのには抵抗がある。しかし咲夜はこのまま一世家にいるかもしれない。咲夜自ら僕と別れてどこかへ行ってしまふことも考えられるが、今のところその可能性は低い。

まあ、なるようになるだろうと開き直ったところで咲夜が僕を覗き込んできた。

「ねえ一樹、一樹は今日何するの？」

「特に予定は無いなあ。初詣は一応済ませたし」

「昨日あの神社に来たやつ？大晦日のうちに参拝してたじゃん。変なことするね」

「そうだったね」

昨日は参拝しながら「どうせ神様なんているもんか」と考えていた気がする。咲夜の話を知るとそんなことも無いらしい。罰が当たるかもしれないな、と軽く考えるが、まあ実際に何かが起こることは無いだろう。毎年同じような考えで参拝してきたし、咲夜が生きていない何かであることは受け容れられても実際に目にしていない神様を信じることもできない。

「うん、じゃあもう一回初詣にでも行こうかな。電車に乗ればちよつと大きな神社があるんだ」

実は屋台のない小さな神社で初詣を済ませたのは初めてなのだ。棚の上に置いてある実晴の写真を見やる。実家で両親もチョコバナナを供えているだろうしいいかと思っていたが、せっかく時間があるなら何か屋台のものを供えてやりたい。

「咲夜も行く！」

嬉しそうにする咲夜を見ると、あの頃の実晴が思

い出される。

コーヒーを机において、炬燵の布団を持ち上げてやると咲夜が入ってくる。……やはり手のかかる妹みたいだ。

*

「人がいっぱいだね」

「咲夜が迷子になったら見つけれないから、手離さないでね」

ホント、人がいっぱいだ。東京の有名神社にはこんなに人が集まるのか。地元は並んでもせいぜい30分くらいだったが、賽銭箱まで2時間待ちだと門で言っていた。東京にもだいたい慣れたと思っていたがまだまだだ。

「お参りは諦めて、もう屋台に向かわない？」

咲夜の様子を見ても、人混みにうんざりしているようだ。口数も少ない。案の定、僕の提案にすぐ頷いた。

屋台の通りも混んではいたが、人の流れがあるだけ賽銭箱の列よりはずつとまじだった。咲夜のマシンガントークも再開し、気を抜くとふらふらとどこかへ行きそうに油断ならない。

「大判焼きって何？どんな味がするの？」

「中にあんこが入ってて、たい焼きみたいな感じ」

「じゃあたい焼きってどんな？」

咲夜が生きていた時代が分からないので例えるのが難しい。

「小豆でできた甘いあんを生地で包んで焼いてるんだよ。要はお菓子」

「ふん。あ、おばちゃん。咲夜それ知ってるよ！キャラクターでしょ。なんでかばんに着けてるの？」

「それはキーホルダー。かばんに着けてる理由は何となくの人がほとんどだよ」

僕の対応もだいたい慣れてきたようだ。咲夜ほどではないが、実晴もたまのお出かけのときには大喜びであちこちを探索したがつたので、いつも僕が手を握っていた。

僕は咲夜がどこかへ行かないように気を付けながら、実晴へのお土産になりそうな屋台を探す。電車であつたのにチョコバナナを持って帰るのは無理だ。

たこ焼き、焼きそば、綿菓子、また焼きそば……定番の屋台がいくつも並んでいる。

「咲夜、気になる屋台ある？ 実晴へのお土産」

「えー咲夜は食べられないし……あ、りんご飴は知ってる！ あれいいんじゃない？」

丁度斜め前にりんご飴の屋台があつた。持って帰りやすいし、良い選択だ。

「いらつしやい！」

「えっと、りんご飴一つ」

「はいよ、大きいのと小さいの、どっちにする？」

実晴の顔を思い浮かべる。大きい方が喜ぶだろう。

「大きい方で」

「一樹、小さいのにしようよ」

「なんで？」

「大きいのは食べてる途中にただのリンゴになっちゃうんだよ？ 知らないの？」

そういえば、昔りんご飴を食べたときにそんな経験をした気がする。りんご飴は表面部分で終わって、中心部分に行くとりんごをそのまま食べている気分になるのだ。

「でも大きい方が喜ぶよなあ」

「じゃあ小さいの二つ買ってあげばいいじゃん」

「ああ、そうしようか。」

小さいのを二つでお願いします」

「はい、小さいの二つね！ 持ち帰りかな？ 袋に入れとくよ」

「ありがとございませす」

小さいりんご飴が二つ入った袋を片手に屋台の通りを出て神社の方へ戻ると、心なしかさつきより空いている。

「お参りはしなくても、中だけ見て行く？」

「行く！ お正月の神社は色々やってるでしょ！」

「そうだね。おみくじとかが定番かな」

「おみくじ？」

「あそこだね。一年の運勢をくじ引きで占うんだよ」

「おみくじは知ってるよ。あれ何が面白いの？」

「中にはおみくじを本気で信じてる人もいるけど、単純におみくじ引いて大吉だったら嬉しからじゃない？ まあ、僕もおみくじはあんまり興味ない側なんだけどね。要はエンターテイメントだよ」

「ふーん……」

咲夜はおみくじの列、そして結果に一喜一憂する人々を見つめている。

「滑稽だね。あの人たちが本物を知ることはないのに」

「滑稽？」

「だってあの人たちは狭間の存在の私すら知らずに一生を終えるんだよ。何の利益もないおみくじで感情を動かしてるとか滑稽じゃん」

「うーん、確かに……？ 楽しいならいいと思うけど」

「そういうことじゃなくて、神様はいるけど現世に干渉しないじゃん。神様が助けてくれるって信じてる人も、神様はいないって勘違いしてる人も、みんな一生真実を

知ることはない。それなのに神様って概念を楽しんでる。滑稽だよ」

そうなのか。そうなのかもしれない。咲夜が言う説得力がある。

「まあ、それならおみくじはいいか。後は何があつたかな？」

「あっち！」

「あ、ちよつと待って」

慌てて咲夜を追いかけて手を握る。油断するとすぐどこかへ行ってしまうんだ。

*

最寄り駅にたどり着くとようやく帰ってきた気分になった。神社から駅まで列ができて、帰りの電車まで混雑していたのだ。

「もう帰るの？」

「これからどこか行きたいの？」

すごい体力だ。やっぱり子どもはすごい。いや、咲夜の場合は子どもだからというより、疲労の感覚がないのかもしれない。

「もう夕方だし、今日は家に帰ろうよ」

僕の言葉に咲夜が首をかしげる。

「……うん、帰る！」

ずいぶんと素直に返事をした咲夜はやけに嬉しそうだ。

「あ、あの子も初詣から帰ってきたのかな？」

咲夜が赤い着物を着て、両親と手をつないで歩く少女を指さす。

夕焼けに着物。両親に囲まれて、絵にかいたような幸

せな光景だ。

「そうかもね。七五三のときみたいだ」

「あの3歳と5歳と7歳でお参りするってやつ？」

「そう。最近神社に行かずに写真を撮るだけの家も多
いみたいだけど」

「写真を撮るの？」

「うん」

「本物が目の前にいるのに？」

「それもそうだね。でも子どもはすぐに大きくなっちゃ
うから、昔の姿を残しておきたいんじゃない？」

「なんで昔の姿を残したいの？」

「後で見返したときに、大きくなったんだなって成長を
感じられるから、かな」

「ふーん、大事にされてるんだね」

心なしか、咲夜の声が暗い。綺麗な着物を着ているし
咲夜も大切にされていたのだろうと思っただが、失言
だっただろうか。

「あの子は何歳かなあ？」

「さっきの子？6歳とか7歳とかそのくらいじゃない？

……どうしたの？」

「咲夜も大きくなりたいたいから。いいなあって」

ああ、そういうことか。咲夜はかなり長い間現世を彷徨
しているらしい。その間自分より小さかった子どもが
どんどん成長して、いつの間にか大人になっているとい
うことを何度も経験したのでだろう。

「大事にされてるから、なのかなあ」

咲夜が呟く。

「どうしたの？行こうよ」

僕はいたたまれなくなつて咲夜の頭をなでる。すると
驚いたように僕を見た後、顔をほころばせた。

子どもは大人に憧れるものだ。大きくなればもつと
色々なことができるようになるだろうと、自分の成長に
期待する。

しかし咲夜は子どものまま永久に変わらない。常に大
きくなりたいという、満たされることの無い望みを抱え
続けているのだ。

ある種、呪いのようなものだろう。

「あのね、咲夜は大人になりたいの！」

横で歩く咲夜が話し出す。

「神社で神様が言ったこと話したでしょ。そのときに
来れば迎えに来るって。咲夜はあれね、神様の世界に連
れて行ってもらえるってことだと思っただ。神様の世界
に行くんだよ。そしたらきつと咲夜も大きくなれるよね」

「うん、そうだといね」

咲夜はよく喋るが、咲夜自身の望みを話すことはあま
りない。今咲夜が話している「大人になりたい」という
欲求は、それだけ強く咲夜の中でくすぶっているものだ
とわかる。

「咲夜は大人になったらどうしたいの？」

「え、大人になったら？そうだなあ……」

大人になりたいという欲求はあつても中々将来像は思
い浮かばないようだ。もしかすると、咲夜の中でも自分
は子どもであるという観念が深く染みついているのかも
しれない。だからこそ来るかもわからない将来を想像で
きず、子ども特有の大きくなりたいという欲求だけを強
く育て続けているのではないだろうか。

さつき頭を撫でたときの嬉しそうな顔が思い浮かぶ。

僕は咲夜にとつては何百年の中の一部でしかないだろう。
しかし、咲夜と話ができる僕がいるだけでも咲夜が喜ぶ

なら、できるだけ応えてやりたい。

咲夜がいつまで居続けるのかは分からない。それでも
咲夜が満足するまでこの声に応え続けるのもいいんじや
ないか。

「咲夜、帰ったら何したい……あれ？」

いない。咲夜がいない。さつきまで間違いなく横で歩
いていたはずなのに。またふらふらと何かに気を取られ
ているのではないかと周囲を見渡すが、夕焼けに染まっ
た道路が伸びているだけで何も無い。

「帰ったら？えつとねえ……一樹？」

一樹は咲夜が見えていないかのようにきよるきよると
辺りを見回している。

「ねえ、ここだよ」

トントんと叩いても反応がない。「咲夜？」と戸惑った
ような顔を明後日の方向に向けているだけだ。

「一樹……一樹」

ああ、またか。この人が咲夜の声に応えることは二度
とないだろう。

咲夜はもう一度一樹の顔を覗き込んだ後、踵を返して
歩き出す。

日が落ち始めた。神社への一本道は明かり一つない。
薄暗い道が伸びるばかりだった。